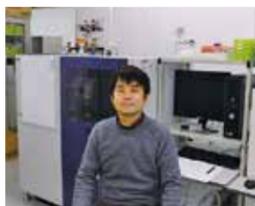


新メンバーの自己紹介

2014年9月から特任講師として着任した眞島英壽(Hidehisa MASHIMA)です。着任するまで知らなかったのですが、故郷佐賀多久の三年山遺跡や茶園原遺跡の発掘をされたのが明治大学考古学研究室とのことで、不思議な縁を感じています。

これまでは、石器材料のサヌカイトや黒曜石を含む北西九州玄武岩類の成因論を出発点として、ホットスポット型火山活動や、日本海の拡大様式などについて研究してきました。岩石学・地質学・分析化学の視点から、黒曜石研究センターに貢献してゆきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。



蛍光X線分析装置を前に

信州黒曜石フォーラム2014が開催されました

2014年11月22日に、長野県下諏訪市の諏訪湖博物館・赤彦記念館にて信州黒曜石フォーラム2014が開催されました。このフォーラムは、長野県及び関連市町村が推進してきた黒曜石原産地と遺跡の調査・研究並びに保存・活用の実績を踏まえ、信州霧ヶ峰・八ヶ岳の黒曜石原産地と周辺の地域における石器時代の黒曜石利用を様々な学問領域から包括的に議論することを通して、黒曜石の生成と原産地の成り立ち、黒曜石利用を巡る人とモノの動き、黒曜石から見た石器時代史と社会の復元などのテーマに取り組んでいます。今回のフォーラムでは、長野県と関連市町村がこれまでに行ってきた黒曜石原産地に関連する遺跡の調査・研究と保存・活用の取り組みについて議論を行いました。さらに、黒曜石をめぐる現在までの取り組みの到達点を確認するとともに、本県以外での黒曜石を対象とした保存と活用の事例についての講演が行われ、今後の課題や可能性、さらにそこから導かれる今後の活動の方向性を再確認しました。



信州黒曜石フォーラム2014の会場風景

講演内容

松村倫文 (津軽町教育委員会) 「白滝ジオパークにおける黒曜石の利活用」
大竹幸恵 (長和町教育委員会) 「信州型世界遺産の目指すもの」
宮坂 清 (下諏訪町教育委員会) 「黒曜石原産地遺跡の活用を考えるー研究史を紐解いてー」
小林深志 (茅野市教育委員会) 「茅野市の史跡整備と縄文プロジェクト」
櫻井秀雄 (長野県教育委員会) 「長野県における黒曜石原産地遺跡・関連遺跡の保護」

司会・討論司会

橋詰 潤 (明治大学研究・知財戦略機構)
小林正春 (長野県考古学会会長)
島田和高 (明治大学博物館)

主催

信州黒曜石フォーラム実行委員会 (委員長: 小野 昭 [明治大学黒曜石研究センター]、岡谷市教育委員会、諏訪市教育委員会、茅野市教育委員会、佐久穂町教育委員会、長和町教育委員会、下諏訪町教育委員会、長野県教育委員会、長野県立歴史館、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、長野県考古学会、明治大学博物館)

お知らせ

黒曜石研究センターでは、2014年よりFacebookによる情報配信を始めました。これから、センターに関連するニュースや活動、季節ごとの移り変わりを写した写真などを配信していきたいと思っております。また、黒曜石研究センターのホームページにも、Facebookと同様な情報と、組織や研究の概要についてを日本語だけでなく英語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語で紹介しております (<http://www.meiji.ac.jp/cols/>)。文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業である「ヒト・資源環境系の人類誌」のホームページ (<http://shigenkankyo.org/index.htm>) も開設していますので、是非ご覧ください。

編集後記

2014年4月にこちらに着任して初めての冬を迎えています。鷹山の冬の印象は、平地とは違った寒さの厳しい、さらに雪深い環境です。道路に出てきた鹿をかき分け車で通勤しています。

さて、黒曜石研究センターニュースレターの第4号をお届けいたします。今回は、黒曜石研究センターが推進してきた、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業である「ヒト・資源環境系の人類誌」も残すところあと1年となるため、その調査報告と、2014年度に開催された国際ワークショップの記事が中心となります。センターでは1年を通して沢山の活動や行事などがありますので、ニュースレターやFace-bookなどを通して情報発信をしていきたいと思っております。

(MT)



鷹山での大雪 (2014年12月16日)

※当センターでは、施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。

黒曜石研究センター
ニュースレターCenter for
Obsidian and
Lithic
Studies News Letter No.4

第4号
2015年3月

Contents

◆ 巻頭言～新しい世代の活躍に期待して～ (副センター長 阿部芳郎)	1
◆ 2014年度スタッフ・組織	2
◆ 紀要『資源環境と人類』第5号刊行	2
◆ 広原湿原測量・ボーリング調査	3
◆ 若手研究者のための国際黒曜石ワークショップが開催されました	3
◆ 新メンバーの自己紹介	4
◆ 信州黒曜石フォーラム2014が開催されました	4
◆ お知らせ	4
◆ 編集後記	4

巻頭言

新しい世代の活躍に期待して

阿部芳郎 (明治大学文学部)

黒曜石研究センター副センター長

わたしが現在では黒曜石の里とも呼ばれる鷹山の地に立ったのは、1995年の夏だった。岡山大学から明治大学に赴任した初年度の夏休みに考古学専攻の実習調査が行われたのだ。星糞峠と呼ばれる峠の鞍部は草むらをかき分けると、夜空に輝く星のごとく夥しい黒曜石で散りばめられていた。私が調査を担当したのは、採掘址ではなく、工房のような性格をもつ竪穴状遺構であったが、丁寧に掘るとチップにも単位があることは容易に判断できた。その内容物はどのような構造をもつのか興味も湧いたが、遺構完掘の厳命もあり、その想いは果たせなかった。帰京して間もなく、今度は東京都北区中里貝塚の調査に携わることになり、こちらも厚い廃棄物の層との格闘が続いた。

その当時、やがてのちに国の史跡となる両遺跡の調査を同時に体験したわたしは、石器時代人がどのような意識で身の回りの資源を利用したのか、ということを経験した。調査を通じてごく自然に考えるようになった。「海の中里・山の鷹山」という言葉が新発見の意義付けに拍車をかけ、遠隔地の資源との物々交換がこれらの遺跡を生み出したと報道され注目を浴びたが、一方で「それは本当だろうか」という疑問も浮かんだ。石器時代に等価交換が存在したことは推測はできても、まだ誰も証明できていないからである。中部高地に海の資源が、そして東京湾岸の中里貝塚に山の資源が、交換対象として流通した痕跡は、現時点では見当たらない。そんな話題を大学の授業で扱いつつ、わたしは今でも海側からこの問題を考え続けているが、先はまだ

長そうだ。小野センター長の新体制ではじまった黒曜石研究センターの活動は、「ヒト・資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」をテーマとして学術的な研究を推進してきた。国内外の研究者を迎えての実践的な研究がつけられているが、その成果を大学の教育にどのように活かすかということも、その当初から重要な課題として意識されていた。

そして今年度から、考古学専攻の2名の教員が加わり、大学院生を対象とした2つのカリキュラムを開講することにした。資源利用という視点から広大な人類史を見渡すダイナミックな研究の実例を学び、夏休みには大学のキャンパスを出て、黒曜石研究センターでの分析機器の利用方法などを実地で学べるカリキュラムを作った。このような大学は他に類例がなく黒曜石研究センターが教育機関としてもはたす役割は大きい。

また、今年度は国内外の若手の黒曜石研究者を対象にしたワークショップが開催された。ここでは9か国の若手研究者との交流が図られ、本学からも2名の院生と聴講生が参加しポスターセッションをおこなった。若手にはそれぞれの独創性があるだろうし、その声に耳を傾けることは大学人ならではの楽しみでもある。新しい感性が鷹山の地で研ぎ澄まされ、やがて世界に羽ばたいて行くことを期待したい。



野外調査風景

2014年度スタッフ・組織

◆ センター長 : 小野 昭 (明治大学研究・知財戦略機構特任教授)

◆ 副センター長 : 阿部芳郎 (明治大学文学部教授)

◆ センター員 (50音順)

池谷信之 (沼津市教育委員会)

及川 穰 (島根大学法文学部准教授)

島田和高 (明治大学博物館学芸員)

隅田祥光 (長崎大学教育学部准教授)

須藤隆司 (明治大学研究・知財戦略機構客員研究員)

諏訪間 順 (小田原市観光課小田原城天守閣館長)

大工原 豊 (國學院大学兼任講師・青山学院大学非常勤講師)

土屋美穂 (明治大学研究・知財戦略機構特別嘱託職員)

堤 隆 (浅間縄文ミュージアム主任学芸員)

中村由克 (明治大学研究・知財戦略機構客員教授)

橋詰 潤 (明治大学研究・知財戦略機構特任講師)

藤山龍造 (明治大学文学部講師)

眞島英壽 (明治大学研究・知財戦略機構特任講師)

山田昌功 (明治大学研究・知財戦略機構特別嘱託職員)

吉田英嗣 (明治大学文学部講師)

吉田明弘 (明治大学研究・知財戦略機構共同研究員)

◆ 運営委員会

小野 昭 委員長

阿部芳郎 副委員長

大竹憲昭 委員 (長野県埋蔵文化財センター調査部長)

高山茂樹 委員 (明治大学研究推進部長)

藤野次史 委員 (広島大学総合博物館教授)

矢島國雄 委員 (明治大学文学部教授)

◆ 事務担当

河野秀美 (明治大学研究知財事務室)

益田錦一郎 (明治大学研究知財事務室)

紀要『資源環境と人類』第5号刊行

黒曜石研究センターでは、2011年3月より紀要『資源環境と人類』を刊行しています。2015年3月に第5号が刊行されますので、是非ご期待ください。

【第5号(2015年3月刊行)目次】

◆ 論文

佐瀬 隆・細野 衛・公文富士夫「長野県長和町、広原湿原地域におけるササ類の地史的動態と黒ボク土層生成史」

橋詰 潤, I. Y. シェフコムード, 内田和典, M. V. ガルシコフ「アムール下流域における土器出現期の研究(2)ーオシノヴァヤレーチカ10遺跡における2012年, 2013年調査の概要ー」

那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石 甫「炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用」

中村由克「和田・鷹山地域の黒曜石河川礫の分布調査」

隅田祥光・土屋美穂「長野県霧ヶ峰地域における黒曜石原産地試料の元素分析と黒曜石製石器の原産地解析(予報)」

◆ 総説

山田昌功「前期・中期旧石器時代における黒曜石」

◆ 研究ノート

那須浩郎・会田 進・山田武文・輿石 甫・佐々木由香・中沢道彦「土器種実圧痕の焼成実験報告」

◆ 資料報告

及川 穰・隅田祥光・宮坂 清・今田賢治・川井優也・河内俊介・角原寛俊・藤川翔・高村優花・灘 友佳・野村亮弘・藤原 唯「長野県霧ヶ峰地域における黒曜石原産地の踏査報告(2)ー長和町男女倉南地区と下諏訪町星ヶ台地区ー」

◆ 黒曜石研究センター活動報告 2014年度



『資源環境と人類』第5号

広原湿原測量・ボーリング調査

2014年4月19日～27日の日程で、長野県長和町に位置する広原(ひろっぱら)湿原において、湿原とその周辺の地形測量および湿原内のボーリング調査が行われました。この調査は、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト-資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」(2011年度～2015年度;略称:ヒト-資源環境系の人類誌)の一環として行われ、最終年度となる2015年度の報告書作成に向けて最後の調査となりました。調査は、まだ少し雪が残る中、少人数で行われました。

今回の調査では、主に湿原とその周辺の詳細な地形の測量を行いました。この測量データから、GMT(The Generic Mapping Tools)を用いて地形図が作成されました。これを基にして、湿原と周辺遺跡および、これまでの発掘調査地点、2012年に湿原内で行われた機械ボーリングの詳細な位置関係を得る事が出来ました。

ボーリング調査では、ヒーラー型ピートサンプラーを用いたハンドボーリングや、湿原周辺地域の露頭調査が行われました。これらから、湿原の形成過程や湿原への堆積物の堆積状況などが解析されます。

これらは、2015年3月に行われる「ヒト-資源環境系の人類誌」の研究集会や、2016年度刊行予定の報告書で成果が報告される予定です。



トータルステーションを用いた測量の様子



広原湿原周辺での露頭観察

若手研究者のための国際黒曜石ワークショップが開催されました

2014年9月18日～29日の間、黒曜石研究センター(以下、センターと略す)主催の「若手研究者のための国際黒曜石ワークショップ(略称:国際ワークショップ)」が開催されました。この国際ワークショップは、将来の黒曜石研究を担う基盤づくりを目的として、「ヒト-資源環境系の人類誌」および、明治大学国際共同研究プロジェクト、国際第四紀学連合(INQUA)プロジェクトNr.1405の支援を受け、センターの2014年度計画の一環として行われました。日本、ロシア、韓国、中国、ウクライナ、スロバキア、ハンガリー、ギリシャ、イタリアから若手の研究者や博士課程の大学院生など14名が参加しました。参加者は、黒曜石に関連した考古学、理化学分析、保存科学など異なる分野を専門としていますが、期間中は専門分野や国を超えて情報共有や活発な議論が行われました。

参加者は、来日翌日の9月19日に明治大学駿河台キャンパスを訪れ、福宮賢一学長からの歓迎を受けました。9月20日、東京都から長野県長和町に移動し、長和町の協力を得て、黒曜石体験ミュージアムおよび、国指定史跡である星ヶ峰黒曜石原産地遺跡の見学が行われました。星ヶ峰では、黒曜石原石を採掘した跡や、その周辺に散らばる黒曜石原石や黒曜石製の遺物を実際に歩いて観察しました。9月21日には、センター員である島田和高氏の案内によるエクスカージョンが行われました。茅野市の尖石縄文考古館では山科哲氏の案内により展示品や尖石・与助尾根遺跡の見学、

諏訪市博物館では中島透氏案内による展示の見学を行いました。さらに宮坂清氏(諏訪湖博物館・赤彦記念館)の案内で下諏訪町にある星ヶ塔の黒曜石採掘址を見学しました。9月22日には、長和町役場を表敬訪問し、羽田健一郎町長からの激励を受けました。参加者には、長和町の郷土品がプレゼントされ、和やかな雰囲気のもと交流が行われました。

9月22日午後～9月27日にかけて、参加者はそれぞれ口頭もしくはポスター形式での発表を行い、活発な意見交換と議論が行われました。また、この期間中には、3人のセンター員による講義およびレクチャーも行われました。考古学分野では、橋詰潤氏による黒曜石原石からの石器製作が、当時ハンマーとして使用されていたとされる鹿の角などを用いてレクチャーが行われました。また、黒曜石石器の観察や、広原湿原での踏査なども行われました。理化学分野では、隅田祥光氏により蛍光X線分析装置を用いた黒曜石の理化学分析に関する講義が行われました。参加者達が採取してきた黒曜石を実際にセンターの装置で分析し、各黒曜石の化学組成の違いについて議論が行われました。古環境分野では、吉田明弘氏による花粉分析から見た古環境についての講義と、野外にてハンドボーリングを用いた堆積物の採取方法や、採取した堆積物の観察及び記載方法、堆積物中の花粉化石のプレパラート作成などについてレクチャーが行われました。9月28日、参加者は名残を惜しみつつセンターを後にし、9月29日に帰国の途につきました。



広原湿原内でのボーリング演習



黒曜石製石器の観察



国際ワークショップ参加者の集合写真